いま，なぜ「知識主義」なのか

——藤井隆の「知識化のモデル」をめぐって——

中　本　博　皓

1　はじめに

資本主義は変わったのだろうか。そんなことを考えてみたくなることがよくある。

『ゆたかな社会』と呼ばれていたかと思うと，いつの間にか『不確実性の時代』に変わっていたり，なるほどと感心している間に『ゼロ・サム社会』だと人はいう。資本主義ほどいろいろな形容詞で飾りつけられた社会はないように思われる。まさに“七変化”の社会，それが資本主義なのかも知れない。

かつて，カルブレイスは，「集団によるデシジョン・メーキングに参与するすべての人々，あるいはこれらの人々が形成する組織にたいしては，今までのところ名称が存在していないので，私はこの組織を“テクノストラクチュア”と呼ぶことを提案する」と，『新しい産業国家』のなかで書いてから，かれこれ20年の歳月が流れた。この間に，日本を含めて世界は，石油ショックの危機を経験し，そしてそれを超えてきた。いま，人々は，新しい時の流れのなかで何かをもとめて，その手ごたえを待っているようにもみえる。確かに，われわれの周辺で何かがうねりを高めているのだが，それが何だかわからない。私にもそれはわからない。高度情報化社会といわれる時代であるから，多くの情報が断片的には得られるのだが。しかし，それも確かな手ごたえのある感触があるわけではない。

先頃，同文館で主任編集員をしている池田勝也氏から一冊の本が送られてきた。名古屋大学の藤井隆教授の新著『競争と協力』がそれである。

藤井は，いきなり「知識主義がはじまった」と切り出す。一体，それはどういうことかと本書への興味を誘わずにはおかない。ガルブレイスのいう“テクノストラクチュア”に主導されて進展する『新しい産業国家』に夢を託していた途端，砂漠の王様の檄に触れて，そのひと声であわやペシャンコにされかけた『新しい産業国家』に半ば厭き厭きしていたときだけに，この「知識主義がはじまった」という藤井のひと言に強烈な印象を受けた。

藤井は，近代化・工業化・都市化という資本主義社会の発展のなかで，われわれ人間が達成してきたものは一体何だったのかと鋭く問いかけてくる。高度経済成長が，人々の物質的世界に豊かさをもたらしたことも事実だが，反面において公害問題・自然環境の破壊という

代価を払い，そして石油ショックの苦い経験で資源の有限性を知ることができて，人々の間に「かけがえのない地球」という共通の認識が生まれたのは藤井がいうように，せめてもの救いであった。この「共通の認識」をもつことができたのは，60年代から80年代にかけて人間が歩んだ20年間の知慧であるとともに成果でもあった。さらには「強い人間社会の連帯と地球規模の相互依存性の確認ということのうえに，『主体性』あるいは『自律性』ということが，システムとしての世界のなかで強く自覚されるようになった」ことも確かである。その理由を分析するならば，「競争」に対して「協力」ということがメダルへの両面として認識されるようにもなったし，また「サービス化・情報化と欲望とその充足の手段の相関が高次化するとともに，人々の求めるものは，経済財の世界から，人間のチームや組織，社会システムによって支えられた主体性，自律性の表現である秩序としての知識の展開へと大きく移行」しているとみる藤井隆の指摘は正しい。そのことは見方を変えれば，資本主義の時代から「知識主義の時代」がはじまった証左だというわけである。

2　工業化のモデル

われわれは，自分たちが経験してきた時間軸を逆に歩いて「物」のサイドに目を向けてみたとき，19世紀的な企業家の生々しい行動原理に気づく。利潤を最大化することに努力し，それを唯一の目標に一元的な思考体系のもとで彼らは競争に明け暮れてきた。そこでは，「競争」が利潤のための「闘争」としておこなわれてきたのであり，「協力」は本来の意味をもったものではなく，「結託」や「妥協」という行為に白いヴェールを被せたものに過ぎなかったし，それも利潤追求のためであったといえよう。

しかし，知識主義の社会で，それは通用しない。「競争と協力」の一体化のなかに発展を求めなければならない時代だからである。それがまた知識社会の新しい側面なんだと『競争と協力』の著者はいう。

われわれが歴史のなかで構築してきた「工業化のモデル」とは何だったのか。藤井は，生産物は，資本によって生産され，その蓄積過程は，資本によって資本を累積する過程だという。その姿は，“動物生態的企業生態”すなわち，19世紀的企業主義の延長としての資本家社会なのだと指摘している。資本主義社会は「マンモス的肥大と弱肉強食の食物循環の成立と同じ」であり，そうした社会において人間は「社会的エンジン」として市場システムのメカニズムをつくりあげるための単なる細胞にすぎないもので，その細胞分裂に必要なエネルギーが資本であり，資本支配を中心に肥大してきた。そのような見方をするなら，脱資本支配を求めたはずの社会主義社会も工業化モデルのなかの一変態にすぎないのではないかと藤井は極言して憚らない。

3　近代は終わる

それでは，藤井がいう「知識化のモデル」とはどんなものなのか。われわれがこれまで経験してきた「近代社会」とは，西洋の合理主義を柱として成立してきたという認識は正しい。近代合理主義は，理屈によって理屈通りに成り立っている社会であり，それは自同律によって支えられたものであった。その「近代社会」の終焉をもたらしたものは何か。難波田春夫の論理に従えば，「豊かに，ゆたかにと，豊かさを追い求めた人間行動の合理性が故に近代の終焉」をみることになる。豊かさを追い求めているうちに捨てなければ新しいものが作れなくなってしまった社会が，「かけがえのない地球」を認識するに至ったとき，「近代」は大きな転換の局面に立たされることになったといえる。もっと視座を変えて，身近な家族社会の管を通して「近代」を眺めてみたとき，「日本の近代は，“父”の確立に成功しなかった」時代で，父権の崩壊が近代の終焉を告げるのだという論理も存在する。

父権不在は，日本社会を特徴づけているようにもいわれてきたが，今日ではそれも日本的現象として独占できるものではなくなってきている。「西洋でも父権が崩壊し始めており，西洋が逆の方向から日本の状態に近づいている。これもまた近代の終わりを示唆する」ものだと指摘したのは，『硅石器時代の技術と文明』の著者西村吉雄である。西村は，手ぶらの個人が「父」になることはできないのだという。すなわち，空間的にも時間的にも，個人を超える存在が，父の権威を保証しているからで，西洋プロテスタンティズムの「父」も，ひと昔前の日本における儒教的父権も，「天の力」に支えられたものであったという。しかし，大衆化した「物」社会での人々にとってもはや天の神通力は通用しなくなった。そのとき，西も東も父権は脆弱な体質に変わっていたのである。それでも，豊かさをもとめて高度経済成長をしていた間はまだ辛じてその幾分かの強みをもっていたが，化石エネルギーに基礎を置いて発展した工業化モデルが脆くも石油ショックで崩壊し，いまソフト社会の進行によって，父の座は再び大きくゆらぎはじめた。ソフト社会は，母系社会復活の兆しでもある。そのとき，近代は終わりを告げて父権の崩壊を鮮明にしてきたというのが西村の説だ。

4　知識化のモデル

確かに西村の説に一理ある。ならば，藤井の知識化のモデルではどうなのか。藤井隆は経済学者の立場からつぎのように説明する。

知識化のモデルのもとでは，生産手段は知識であり，生産物はこの知識によって生産される。その蓄積過程は，人類のストックとしての知識による知識の蓄積という累積過程で，それは information production by means of knowledge, knowledge accumulation by means of knowledge という知識の具体的表現と知識システム支配を「知識主義」と呼んでいる。

さらに，藤井は敷衍していう。知識モデルの社会では「商品は，その提供するサービスとして使用され，サービスの使用は人間の経験として情報を生み，情報を消費することで人は知識を生産する」ことになのだと。したがって，知識化のモデルのもとでは，「人間は，人間が蓄積した知識のベアラーであり，生産者であり，消費者である」といえる。そこでは，「秩序としての知識の具体的表現が社会システム」となっているそういう社会が「知識主義の社会」なのだと説明している。

では，「知識主義の社会」と，われわれが現に生きている「資本主義の社会」とではどう違うのか，現実の人間の経済行動にフォーカスを合わせてみたとき，1+1=2 という資本主義の公理は成り立たない。これまで，人はカネを稼ぐことに，企業もカネを儲けてそれを蓄積し肥大することに，そして国は GNP 至上主義に，世の中がカネを至上として回転してきたが，知識主義では個人が他人から自からを差異化して個性を回復させて自分らしさに生きていこうとするであろうし，企業もまたその企業が，持ち味を活して「競争」し，社会的に認知された事業体として「協力」し継続することに大きな価値を見い出そうとする。いま，そういう兆候が社会の至る所でみられるようになってきたことは確かである。それは，個人や企業のレベルだけでなく，政府にも同じことがいえるかも知れない。だから，いままでの思考体系で国際的なさまざまなフリクションを解決することはもはや不可能である。そういう認識とともに思考体系の変革が政府レベルで求められるような社会，それが知識化のモデルでは必要ではないのかと藤井は強調してやまない。

5 「競争」と「協力」の時代

いまや，政府も企業も自分本位の考えで行動することはできなくなってきた。

企業家は，グローバル・アントルプルヌールへ，その思考体系を変革していかなければならないし，政府も闘争という名の競争と妥協という名の協力の次元から，社会のニーズに合ったステーツマン・シップへ体質を変えなければならなくなってきている。いまもとめられているグローバル・アントルプルヌールやグローバル・ステーツマン・シップにとって大切なのは「競争と協力」であって「闘争と妥協」ではない。

知識主義の社会では，企業が利潤だけを追求していたその時代とは違って，資本家と労働者という階級図式は存在しなくなるから，システムズグロースをもとめる人々にとって，それは新しい生き甲斐を得ることになる。今日みられるベンチャー・ビジネスの発展や小企業のグループ化も知識の集積が可能になった現代の知識化モデルの具体的表現で，それが，高度情報化社会の到来という厳しい環境変化への対応の一還として，営利を追い求めるものの知的行為の現代的表現形態としての能率主義の結果に過ぎないものなどとは曖気にも出さな

いで，藤井は強気に，資本主義から知識主義への移行を歌い上げている。

6　なぜ「知識主義」なのか

私は，藤井モデルを完膚なきまでに検討したわけではないから，現段階で異論を唱えようとは思わない。しかし，「そうだろうか」と一抹の不安が残る文脈に幾度か出合った。その反面，藤井の論理に惹れるところも多かった。

工業化のモデルのもとでは，「いかに作るか」は「何を作るか」より難しく，消費者が何をもとめているかのニーズを摑めば，それを作っていさえすればカネが儲った時代から，開発した技術を「何に使うか」を考えなければならない時代に到達した今日では，「何を作るか」は「いかに作るか」よりも数段困難なことのように考えられる。藤井がいわんとするところもこの辺にあるように思われるのである。つまり，知識主義の時代には，大衆が個性化しており，大衆が同じものを欲しがった過去の時代とは異なる行動特性をもっている。この大衆を西村は「生産者と言語・文化を共有し，生産者と共にシステムの設計に参与する消費者」とみている。生産と消費が実質的には一体化したプロシューマー集団が「何を作るか」を決める時代に，企業が大資本の力をバックに驕る態度で創造的な生産ができるわけはない。だからこそ，19世紀的な思考体系からグローバルなホロンの思考体系への変革がもとめられるのであり，そこに知識主義の社会における「競争と協力」の本質があるのだという藤井の文脈は理解できなくはない。

7　知識主義は保守主義への回帰か

だが，そういう社会で人間が個性化し，自己を革新していく礎を与えるものは，民族がその風土のなかで培ってきた文化の伝統ではなかろうか。加藤周一は「創造力のゆくえ」(『著作集 (11)』) において，「日本の文化が再び創造的になり得るとすれば，それは必ずや日本文化のなかに抜くべからざる保守主義の育つときであろう」という。芝居の世界を例に挙げて加藤はいう。「新しい芝居の創造されることは絶対にない」と。そして「芝居とはなにかは，手ぶらでは考えられる事柄ではない。まずそこに芝居がなければならぬ。すなわち六平太の，野村万蔵の舞台が目のまえになければならないということになる。それをそこにあらしめるものは，いうまでもなく，文化の伝統であり，保守主義である」と論じている。

いかに労働や資本に代わって知識が生産要素となる知識化の時代であっても，伝統社会の連続性を断ち切れるものではないであろう。社会に起こる一つの大きな攪乱も人間が時間の連続過程のなかで，やがては秩序を再形成していくことであろう。それは藤井も認めており，パーソンズに従って知識は社会システムに体化した一つの秩序であるとみている。

問題は，知識によって知識を生産し，それを蓄積するという知識主義のプロセスを，われわれの資本主義という伝統社会の流列においてみた時，それが新しい社会のシステムなのかどうかという点である。

8　結び

一方，藤井がいうように確かに情報はファイルすることができる。したがって情報市場を形成することもできる。しかしそれは，財や労働の市場と同じように全体の肢体としての意味で考えられるべきものではなかろうか。藤井の知識化のモデルのなかにあるタームをもってすれば，知識主義も高度に発展した資本主義の一変態としての社会であって，資本主義から知識主義への移行というのも，低位工業化モデルの資本主義から高位工業化モデルの資本主義へと1世紀に及んだ工業主導の社会から脱して，新しく迎える知識生産化モデルの資本主義へと資本主義の高度な革命的転換が，いまはじまったのだとみることがわれわれのレベルでの共通の認識ではなかろうか。したがって，藤井の「知識主義がはじまった」という認識も，硅石器時代にシンボル化されたICやファイン・セラミックスの新しい技術を生産手段として展開されるに至った時代の，いわゆる新しい形容詞として，資本主義“七変化”の最後の一つとみては，『競争と協力』の著者に対して，余りにも禮を失することになるであろうか。

（本学経済学部教授）